

人面付土器 “いずみ”

修復中！

①



▲解体前の“いずみ”

平成18年に行われた泉坂下遺跡の学術調査により発掘された、日本で最も大きい弥生時代の人面付土器は、今年度、財団法人朝日新聞文化財団よりの文化財保護助成を受けて、専門家による修復とレプリカ（複製品）の製作を行っています。“いずみ”の愛称で親しまれているこの人面付土器は、どのような手順や技術で修復され、レプリカが作られていくのでしょうか。今月から皆さんにお知らせしていきます。



(財)朝日新聞文化財団
文化財保護助成

「芸術・学術的に価値のある文化財並びに歴史遺産の保存・修復・公開活用等」に対して助成されます。泉坂下遺跡の保存状態が良好で、謎の多い弥生時代の東日本を研究する上で重要であること、また、適正な発掘調査によって出土した人面付土器が、国指定レベルの歴史的・芸術的価値のある文化財であることから、“いずみ”の修復とレプリカの製作に対して今年度助成が認められました。



修復前の“いずみ”

土器のほとんどは割れた状態で出土します。破片を洗い、元の形になるよう市販の接着剤で接合してから、実測図を描いて細かく観察し、写真撮影を行います。しかし、観察しやすいようにと隙間の補強も施していないので、このままの状態では実測等に耐えられる程度の強度しかなく、地震などの災害や長期間の展示、貸し出しに伴う運搬によって壊れてしまう危険がありました。



“いずみ”解体

修復専門家の工房では、まず、溶剤で接着剤を溶かしながら慎重に解体し、番号を付けて元のバラバラな破片状態にしてしまいます。その後、一つ一つの破片を観察して、残っている接着剤や汚れを取り除きます。しかし、土器を作った時の彩色や、使用によって付着した煤すすやおこげは落とさないように注意します。“いずみ”は約2カ月かけて85個、総重量6858gの破片に解体されました。

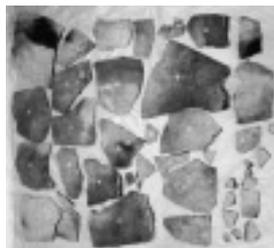


破片の破断面を強化

クリーニングが完了した破片には、将来の再修復も見据え、表面よりもろい破断面（割れ口）を強化するために、取り除くことのできる樹脂を浸み込ませます。8月上旬現在、大小85個の破片の割れ口すべてに細筆で樹脂を塗り、乾燥させる作業を行っています。次回は、プロの接合の様子を報告します。



▲樹脂を塗る作業



▲解体された“いずみ”



写真提供：府中工房
堀江武史氏

作業工程

解体・クリーニング

接合

充てん

補彩

レプリカ製作

8月上旬

歴史民俗資料館

☎ 52-1450